

落合界限の今昔

落合というところ

新宿区落合の地域は、北側が武蔵野台地、南側は妙正寺川と神田川が流れる低地で、二つの川が合流するところという意味で名付けられました。

西武新宿線が妙正寺川に沿うように走っています。旧西武鉄道の前身は川越鉄道であり旧西武鉄道時代の昭和二年に高田馬場（仮駅）と東村山の間で運行を開始しています。翌年現在の西武線高田馬場駅が開業をしています。武蔵野鉄道（現在の西武池袋線）と昭和二〇年に合併し現西武鉄道となっています。下落合の駅は昭和二年（一九二七）に開業していますが、現在の駅より東に三〇〇m寄ったところの水川神社前にありました。現在地になったのは昭和五年（一九三〇）のことです。



▲ 1930年の地図では落合駅は古いまま

頃、多くの著名人達が居住していました。当初から道路の整備はもちろん屋外の電線は地下埋設式、ガス・水道・下水の設置、クラブハウス・テニスコートなどが付帯設備として整備されていました。しかし、昭和一〇年（一九三五）から山手通りの建設、東京大空襲、昭和四二年（一九六七）の新目白通りの開通により、現在では当時の面影は殆ど見当たらなくなりました。

目白文化村ができた頃の落合の風景あれこれ

平林たい子が、高見沢路直（田河水泡）から紹介された岡田龍夫を訪ねて目白駅から歩いたときの情景を『砂漠の花』のなかで次のように書いています。

『その頃の落合は、みまわす限りの野菜畑で三井家の墓所がある高台が林のように見えた。西武電車も武蔵野電車もまだ通っておらず、西武電車の予定地が買収されて、赤いペンキ塗りの杭の標識が野菜畑の間に立っていた。すがすがしい郊外のようながめを楽しんで三十分も歩いたころ、大小の石碑が背をならべた墓が見えて、その前に物置小屋のような小屋がぼつんと



▲ 江戸名所図絵 落合惣図

目白文化村

目白文化村は、大正から昭和にかけて奥多摩郡落合村（現在の新宿区中落合一、二丁目の一部と三、四丁目の大半、中井二丁目と中落合の一部）一帯の区域にまたがる郊外型の住宅地として、箱根土地（株）の経営者、堤康次郎が開発に手を染めました。大正一一年（一九二二）六月に目白不動園（第一文化村）として宅地の販売を開始し、その後、目白文化村と改名をしました。最後の第五文化村が昭和四年（一九二九）に分譲された

一軒建っていた。見晴しはひろびろとして、ところどころに竹藪でかまされた農家がみえるばかりである。』

また、林芙美子は、『落合山川日記』に次のように書いています。少し長いが引用してみます。

『私は、和田堀（わだぼり）の妙法寺の森の中の家から、堰（せき）のある落合川（おちあいがわ）のそばの三輪の家に引越しをして来た時、はたきをつかいながら、此様なうたを思わずくちずさんだものであった。この堰の見える落合の窪地に越して来たのは、尾崎翠（おざきみどり）さんという非常にいい小説を書く女友達が、「ずっと前、私の居た家が空（あ）いているから来ませんか」と此様に誘ってくれた事に原因していた。前の、妙法寺のように荒れ果てた感じではなく、木口（きぐち）のいい家で、近所が大変にぎやかであった。二階の障子（しょうじ）を開けると、川添いに合歓（ねむ）の花が咲いていて川の水が遠くまで見えた。

東中野の駅までは私の足で十五分であり、西武線中井の駅までは四分位の地点で、ここも、妙法寺の境内（けいだい）に居た時のように、落合の火葬場の煙突がすぐ背後に見えて、雨の日なんぞは、きな臭（くさ）い人を焼く匂（にお）いが流れて来た。

その頃、一帖（いちじょう）七銭の原稿用紙を買いに、中井の駅のそばの文房具屋まで行くのに、おいはぎが出ると云う横丁（よこちょう）を走って通らなければならなかった。夜など、何か書きかけていても、原稿用紙がなくなると、我慢して眠ってしまう。ほんの一、二町（ちよう）の暗がりの間であったが、ここには墓地があったり、掘り返した赤土のなかから昔の人骨が出て来たなどと言う風評があったり、また時々おいはぎが出ると聞くと、なかなかこの暗がり横町は気味の悪いものであった。その頃はまだ手紙を出すのに東京市外上落合（かみおちあ）と書いていた頃で、私のところは窪地にありながら字上落合三輪と呼んでいた。その上落合か

ら目白寄りの丘の上が、おかしいことに下落合と云って、文化住宅が沢山並んでいた。この下落合と上落合の間を、落合川が流れているのだが、（本当は妙正寺川と云うのかも知れぬ）この川添いにはまるで並木のように合歓の木が多い。五月頃になると、呆（ぼ）んやりした薄紅の花が房々と咲いて、色々な小鳥が、堰の横の小さい島になった土の上に飛んで来る。



▲ 林芙美子（昭和九年）

まず引越しをして来ると、庭の雑草をむしり、垣根をとり払って鳳仙花（ほうせんか）や雁来紅（がんらいこう）などを植えた。庭が川でつきてしまうところに大きな榎（えのき）があるので、その下が薄い日蔭になリなかなか趣があった。私は障子を張るのが下手なので、十六枚の障子を全部尾崎女史にまかせてしまつて、私は大きな声で、自分の作品を尾崎女史に読んで聞いて貰つたのを覚えている。尾崎さんは鳥取の産で、海国的な寂しい声を出す人であった。私より十年もの先輩で、三輪の家から目と鼻のところに、草原の見える二階を借りてつましく一人で住んでいた。この尾崎女史は、誰よりも早く私の書くものを愛してくれて、私の詩などを時々暗誦（あんしやう）してくれては、心を熱くしてくれたものであった。妙法寺に住んでいた頃、やつとどうやら私の原稿が売れ出して来ていたのだが、この家へ越して一ヶ月すると、私は放浪記を出版する事になった。原稿が売れると云つても、まだまだ国へまで送金どころか、自分たちの口が時々干上（ひあが）るのが多くて、私はその日も勤め口を探して足をつっぱらして帰つたのであった。玄関の三和土（たたき）の濡れた上へ速達（そくたつ）が落ちていたのを、めつたにない事だと胸をドキドキさせて読んで行くと、「放浪記出版」と云う通知なのであった。暫（しばらく）くは私は眼がくらくらして台所で水をぐくぐく飲んだものだ。嘘のような気がした。誰かが

悪戯（いたずら）したのだろうと思った。七、八年と云う長い間、私の原稿などは満足に発表された事なんぞなかったのだ。原稿を持って雑誌社へ行って、電車賃もないのでぶらぶら歩いて帰って来ると、時に、持って行った原稿の方がさきまわりして速達で帰っている事があった。』

このとき住んでいた三輪の家は川の改修工事では川の中となっていない。

若山牧水は、違う地点から落合のことを書いています。

『そして目白橋を渡つて、左折、近衛公のお邸に行き當つて右折、一二町もゆくとところゝとした下り坂になつた其處の窪地全體が落合遊園地といふものになつてゐた。それこそ誰も知らない遊園地で、窪地の四方をば柔かな雑木林がとり圍み、中には小さな池があり、池の中の築山には東屋なども出来てゐた。

また、遊園地に入らずにその入口の處から左に折れてゆく下り坂があつた。其處もほそ長い窪地になつてゐて、いろゝゝな雑木のなかに二三本の朴の木が立ち混り、夏の初めなどあの大きな白い花が葉がくれに匂つてゐたものである。降りきつた右手の所に、藤の古木があるので藤稻荷と呼ばれてゐる稻荷の祠があつた。（今でもこれはあるだらう。）その境内も一寸した高みになつてゐた。其處から丘づたひに左は林右は畑といふ處を歩いたのもいゝ氣持であつた。そして此處の丘にはこの邊に珍しい松の木立があつた。ほんのばらばらとした小さなものであつたが、東京の北から東にかけての郊外では全く珍しいものであつた。今は稻荷の側からかけて幾軒かの大きな別荘になつてゐたとおもふ。その丘を降りた所に氷川神社といふがあり、神社の境内に小さな茶店などの出てゐる事もあつた。もう少し歩かうとそのまゝ丘に添うて西北へゆく（青空文庫 樹木とその葉二九東京の郊外を想ふ 参照）。』

夏目漱石は『三四郎』の中で次の様に書いています。

『三四郎は新井（あらい）の薬師（やくし）までも行つた。新井の薬師の歸りに、大久保へ出て野々宮君の家へ回ろうと思つたら、落合（おちあ

い）の火葬場（やきば）の辺で道を間違えて、高田（たかた）へ出たので、目白（めじろ）から汽車へ乗つて歸つた。汽車の中でみやげに買った栗（くり）を一人でさんざん食つた。その余りはあくる日与次郎が来て、みんな平らげた。（三四郎より青空文庫参照）』

昔の落合の様子が見えてきました。

今回は、三四郎が歩いたコース（明治四一年頃）をたどり、牧水が散歩したコース（明治四〇年頃）をさかのぼることとしましょう。

新井薬師

新井薬師は、梅照院というお寺のご本尊で、相模の国の僧行春（ぎょうしゅん）が、新井の里で真言密教の草庵としてふさわしいと感じ築き、そこにあつた梅の古木から鎌倉時代に新田家から忽然と消え去つたご本尊が見つかり御堂を建立したのが始まりと言われている。（梅照院 ホームページより）

ここに新井の五叉路という交差点があります。五叉路は高円寺方向から来る道が荒玉水道で哲学道から野方方向に道が延びています。



▲ 新井薬師参道

荒玉水道

地図を見ると、砧浄水場から真直ぐの道があるのを見ることが出来ます。ちなみに追いかけてみると堀之内まで一直線です。荒玉水道道路で

す。その先は真直ぐな道はありませんが新井の五差路に突き当たり、中野通りを進むと新井薬師を右に見て、哲学堂の脇を通り野方配水塔にたどり着きます。さらにそのまま真直ぐに進むと南長崎六丁目を経て大谷口配水塔に着きます。

荒玉水道道路は「杉並南出張所界隈」のときに一度取り上げていますが、もう一度おさらいをしてみます。

関東大震災後、人々が都心から周辺の郡部に住居を求めたことにより、急激な人口増がおきて、町村で水道開設の要望があり、町営や会社による水道事業が府下で一三もあったそうです。

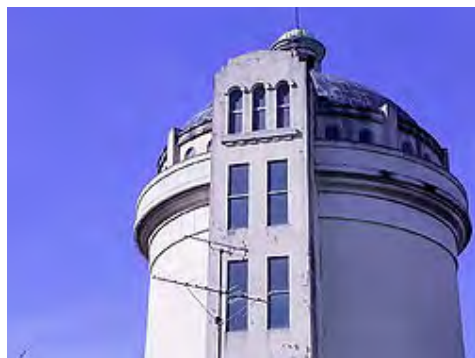
主なものをあげると多摩川を水源とした玉川水道株式会社（品川町、大森町、蒲田町など一四町村）、渋谷町水道（渋谷町）、荒玉水道町村組合（王子町、巢鴨町、板橋町、落合町、野方町、杉並町など一三町村）、江戸川を水源とする江戸川上水町村組合（隅田町、寺島町、砂町、南千住町、亀戸町、尾久町など一二町村）が存在しました。

この頃は、牛乳の普及が進んで郊外に多くの牧場が作られました。豊島区や新宿区も多くの牧場がありました。荒玉水道で落合町に給水されたのは、長崎町字五郎窪四二六四番地（現・南長崎六丁目）にあった粕山牧場の前へ、第七幹線と呼ばれた枝管が埋設されてからのことだと思われます。野方配水塔が昭和五年（一九三〇）にできてからは落合の一般

家庭にも水圧がかけられるようになったため給水できるようになりました。昭和四一年（一九六六）にはこの配水塔も使用停止し、現在は中野区の平和史

跡となり、平成二二年（二〇一〇）には国の登録有形文化財となっています。

ちなみに、大谷口配水塔は昭和六年（一九三一）に竣工しており、王子・滝野川方面の製紙工場への給水を主として運用が始まっていました。昭和四七年（一九七二）に停止し、こちらは平成



▲ 野方配水塔

一七年（二〇〇五）に取り壊されています。なお、水道局は、平成二三年三月から大谷口給水所を整備して運用を開始しています。

また、管を敷設した所は荒玉水道道路として昭和九年（一九三四）に世田谷区喜多見から杉並区梅里まで歩行者専用道路となり使用されました。その後、制限がありますが車道になったのは昭和三七年（一九六二）からです。

いざ出発

新井薬師参道を出て上高田本通を進むと上高田中通にです。上高田中通を進んで行くと中野史跡めぐりという案内があり、「たき

びの歌発祥の地」と書いてあり、矢印があります。昭和一六年に発表され、昭和二四年にNHKのラジオ番組「歌のおばさん」で安西愛子らが歌い広まった童謡で、作詞は巽聖歌、作曲は渡辺茂です。この案内の近くに当時の風景を彷彿させる場所があるようです。

道を進んでいくと。左から来る道と合流したところに万昌院功運寺があります。吉良上野介の墓所と林芙美子の墓所もありました。寺院の前を進むと二股



▲ 分かれ道



に別れます。右に行くと東中野方面、左にいくと焼き場（落合斎場）になります。今は右の道は広くなっていますが当時は周りに何も無く同じような道だったのかなと思います。

落合斎場

現在の日本における火葬率は九九%以上と世界の中で比べても火葬率が高い国だそうです。江戸時代初期に各寺院の境内で荼毘所や火屋をしつらえて行っていたのが始まりのようです。しかし臭気等の問題もあり郊外に集約されていったようで、江戸五三昧と称されて、小塚原・千駄木・桐ヶ谷・渋谷・炮録新田に火葬場ができました。三昧とは火葬場のことをいいます。

幕末には、小塚原に加えて深川霊巖寺・砂村新田極楽寺・芝増上寺今里村下屋敷・代々木村狼谷・上落合村法界寺・桐ヶ谷村霊源寺の七カ所になりました。

明治六年江戸市中（朱引き内）の火葬と埋葬の禁止令をだしましたが、明治八年には廃止されています。しかし火葬場は深川と芝は許可が下りませんでした。

明治二〇年の「火葬場取締規則」ができ、小塚原は町屋に、砂村は荻新田に移り新たに日暮里と亀戸に設置する許可が下りました。日暮里と亀戸は「東京博善」という会社が運営することになりました。しかし、火葬場設置の反対運動が



▲ 落合斎場

起こり、日暮里と亀戸は町屋に移動することになりましたが、既に町屋には小塚原から移動していた町屋火葬場があったので敷地を倍増しそこに日暮里を設置することになりました。今でも入口が二カ所あるのはこのためです。

「東京博善」はこの間に落合と代々木を買収し業務拡大を行っていました。現在では「東京博善」はここ落合斎場を含め町屋・代々木（代々幡）・四ツ木・桐ヶ谷・堀ノ内を運営しています。

林芙美子はこの匂いのことを書いており、引越す前に住んでいた堀之内もそばに焼き場があったと書いています。

落合斎場の前でまた二つにわかれ、左に行くと最勝寺の前を通り山手通りを渡り、進んでいくと落合第二小学校の前に出ます。道なりに進むと光徳寺の前に出て落合水再生センターの正門前にですが今回は寄り道をしました。

月見岡八幡神社

月見岡八幡神社は旧上落合村の鎮守社で、境内が昭和三六年に落合処理場の建設予定地に組み込まれたため、近隣の公園と社地を交換し現在地となりました。ここには、区指定の文化財が多数あるそうです。（新宿観光振興協会ホームページより）

落合水再生センター

大正六年に東京護謄株式会社として設立され落合の地に昭和



▲ 月見岡神社

五年に移転し、西武ゴム、西武ポリマ化成と名前を変えていった会社の跡地と、一部は関東重工業のちのフタバ産業の跡地に、落水水再生センター（当時は落合処理場）は昭和三九年に開設しました。開設当時は珍しい覆蓋された近代的な水再生センターでありました。上部には運動公園が開設され新宿という町中にありモダンな感じがしました。

三四郎の頃はまだ西武線は通っていませんから、そのまま進むと氷川神社にでておとめやま公園のわきを通り、学習院下あたりで目白駅（当時は高田馬場駅（明治四三年開業）もありませんでした）についたものと思われま

薬王院

東長谷寺薬王院は昭和四一年に総本山の長谷寺より一〇〇株のボタンを拝受し、今では四〇種一〇〇〇株のボタンがあり、四月中旬ともなると艶やかなボタンの花が咲きほころびます。私が落合に住んでいた昭和五〇年ごろ一度訪れたことがあり、とても綺麗であったと記憶しています。



▲ 薬王院



▲ 落水水再生センター正門

氷川神社

由緒ではかなり古くからあるようです。新目白通りができるまでは境内も広がったようですが、今はそれほどありません。

おとめ山公園

江戸時代は將軍家の狩猟地で一般の人は立ち入り禁止ということで御留山といわれていたそうです。明治になり近衛家がこの辺りを買いましたが、その後西側を相馬家に譲渡し、東側を近衛家が所有しました。相馬家は林泉園という庭園を構築

しました。近衛家は大正時代に住宅地として分譲しました。相馬家の土地は終戦後、大蔵省が所有していましたが、荒れ放題のこの地を公務員宿舎にする話ができました。地元の人々が陳情すること



▲ 江戸名所図会 氷川神社 ▼ 現在の氷川神社



▲ おとめ山のせせらぎ



園として生き返らせることができました。一部公務員宿舎になっていましたが最近になり宿舎の廃止に伴い、その土地を譲り受けて公園として整備しています。また、一二年前からは蛸も鑑賞できるようにになりました。私が昭和五〇年頃、落合に住んでいた時は、小さな滝があったように記憶していますが今でも健在なのでしょうか。

東山藤稲荷神社

近くまで行くと狐ではなく猫が多く、私たちの前を猫が先導してくれました。さすがに鳥居を過ぎて後をついて行ったところ氣に障ったのか「フー」といって脇にそれて行きました。若山牧水の頃は現在地より下にもう少し大きくあったようで、新宿区の文化財よると、もとは現在地の坂下（下落合二一〇―七付近）にあったが、第二次大戦で焼失し、昭和二八年現在地へ移転した。「江戸名所図会」には旧社地での様子が図示されており、それによると堂舎もいくつかあり、かなりの神社であったことがわかる。また、藤の大木があったため社名の由来となった。境内には文化一五年（一八一八）に奉納の神狐一對と、寛延三年（一七五〇）と天保九年（一八三八）に奉納された二つの水鉢がある。ということでした。



▲ 現在の藤森稲荷神社



▲ 江戸名所図会 藤森稲荷神社

水琴窟

目白駅のすぐ西側に旧近衛邸がありました。壮大な土地であり、全記述のように御留山公園もその一部でした。大正一一年には近衛町として東京土地住宅が売り出されました。大正一三年に建てられた藤田邸（旧 鈴木邸）は場所がわからず、近衛邸の車回しであった近衛けやきと言われるところの近くにあった下落合三丁目駐在所で聞いたところ親切に教えていただきました。駐在所の方がおっしゃるには近衛邸の玄関にあたる場所だったそうです。

藤田邸は、現在喫茶店「花想容」を営んでいるのでお茶を楽しみながら水琴窟を見ようと思いましたが、着物の着付け教室開催で貸切りになっていました。お茶はできませんでしたが、無理を言って水琴窟をのぞくことができました。ご主人が言うには雨が降ると今でも綺麗な音を聞くことができるとのことでした。そのほかにも水琴窟は、服部政吉建築土木事務所の庭園にあったと言われていますが、今はどうなっているでしょう。

（文責 小松）



▲ 花想容（藤田邸）の水琴窟



▲ 元近衛邸の馬廻りのケヤキ

参考資料

落合道人のホームページ

取材後記

二つの文士村

取材を進めている内に林芙美子は二つの文士村と関わりがあることが分かりました。一つは林芙美子が終の棲家として過ごした落合文士村で、もう一つが田端文士村です。

JR 田端駅北口を出ると道路の向かい側に田端文士村記念館が見えます。田端で暮らした著名人を紹介して二〇年が過ぎ、開設二〇年記念誌を二年前に発行しています。記念誌の中で、田端地域は明治二二年に東京美術学校が設立され、それ以降数多くの芸術家、文芸家らが住み、主な人だけでも七〇名余りを数えます。文士村といわれる所以です。

大正三年に芥川龍之介がこの地に住み着くと龍之介を慕って、五年後には室生犀星・萩原朔太郎など次々と小説家らが住んでいきます。林芙美子は大正一三年四月から三ヶ月間田端に住んでいました。

文豪ゆかりの食事

田端文士村附近には、都立駒込病院があります。明治一二年に当時の内務省より駒込避病院として開設され、明治三〇年に東京市に移管され伝染病院となっています。開設当時の事務局長が芥川龍之介の養父でありその関



▲ 芥川龍之介



▲ 田端文士村記念館

係で龍之介が田端に住んだことはあまり知られていませんが事実のようです。

また、私たち化学に携わる者ががよく使う駒込ピペットは駒込病院長であった二木謙三氏が考案し使用したことから名前がついたようです。

駒込病院の栄養科では、患者さんが少しでも食事を楽しんでもらえるようにと、田端や文京地区に住んでいた文芸家たちゆかりの食事を病院食としてアレンジして提供しています。芥川龍之介、サトウハチローなど数多くの文人たちの好んで食べたと言われる食事のレシピも掲載されていますので、一度病院のホームページを覗いてみてください。ちなみに林芙美子はうなぎの蒲焼と野菜の酢の物を合わせた「鰻ざく」でした。

林芙美子記念館

落合は坂の多い町です。この辺りは川から高台に沿ってハケ（崖線）が連なり、坂も急で一の坂から八の坂まであり、林芙美子記念館は四の坂に沿っています。



▲ 林芙美子記念館 林邸の玄関



▲ 田端文士村の案内図

林芙美子は「放浪記」が落合に住み始めた昭和五年ごろから売れ始め、昭和一四年に現在の記念館のある場所に五〇〇坪程の土地を買い求めました。家を建てるにあたり設計者を連れて京都などの民家を見学してまでこだわったようです。大きな家を建てる予定でしたが、その当時は建坪制限（三〇坪程）があったため、自分名義と画家である夫名義の家を建てその間をあとから渡り廊下でつなぎました。家族の生活を大事にし、生活スペースはお金をかけて造作しましたが、客間などは簡単な作りだったようです。

トイレは当時から水洗化されていたようで、案内をしていた方に廃水の行き先を聞いたところよくわからないとの回答でした。

芙美子は料理が好きで、今でいうシステムキッチンのような台所で料理を作っていたそうで、当時はまだ珍しい電気冷蔵庫（日本製）を使っていました。国産電気冷蔵庫は



▲ 林芙美子がこだわった台所



▲ 落合文士村案内図

昭和五年の芝浦製作所が最初のようにです。倉庫には氷の冷蔵庫もありました。お手伝いさんの部屋は三畳ほどで、二段ベッドを造りつけにし、フランスに行った時の寝台車をモデルにしたと言われ機能的になっています。

芙美子は養子をもらい、泰（やすし）と名付け可愛がり、外国からピアノを購入したり、後に裏山を五〇〇坪ほど買い足し、バラ園のほかに泰のためにプールも作りました。しかし、泰は二〇歳ごろ交通事故でこの世を去ったとのことでした。

バラ園のバラを近くに住んでいた画家の刑部人（おさかべ じん）が油絵に書いており、刑部人は林芙美子が持参したバラしか油絵に描かなかったとか？現在はそのバラ園も無く、土地も売られています。



▲ 林邸を庭から望む